

種子屋久

先賢具傳

種子屋久先賢傳序

森遠藤二子隱約就閑不求名或耕或讀唯任意之所往耳而方民間有事則抒慮竭力未嘗辭勞也余頗服其儒行矣茲歲丁卯鄉土之士胥謀將禮先賢請二子撰其傳於是遐邇徵索校訂詮次期年而成焉可謂勞也矣其編述自建久迄昭和凡一百有一名有治績焉有篤行焉有農業武術文學焉章章可觀也嗚呼種子屋久先賢之施乎後世者何其偉也後進之子弟須要顯然仰之且大憤發而報其先焉也哉余曩擇此土而承乏於中學校察風稽俗竢二子者多矣徵序義不可辭乃不顧淺劣敢述數言云爾

昭和二年十二月上浣

於築竹書院

野口德太郎謹序

## 例言

一、數年前より一部有志家に因て先賢祭を行ひ、若くは祠賢堂を設け、後進の子弟をして矜式する所  
あらしめんとするの議ありしも、未だ其機會を得ざりき。然るに本年は栖林君甘藷を中山國より  
得られしより二百三十年に丁るを以て、其記念祭を執行せんとするに際し、併せて先賢祭を行ふ  
こととなり、其略傳を叙して本編と爲す。

一、先賢凡そ二百一名、其九十三名は先師豊山前田翁生前編者に舉似せられたりし者、其他の八名は  
栖林神社復興會委員會の増撰に係るものとす。而して今は則翁も其一章にあり、感慨無量。若夫  
各傳記は各家譜系及文書或は目睹親聽せしものに據り、敢て私見を挿む所なし。即述べて作らざ  
るものなり。

一、或は生歿年月日不詳なるあり。或は繁簡宜しきを得ざるあり。是實に文獻の徴すべきもの無きと  
編者の非才寡聞の致す所なり。

一、記載は年代によりて次第し、生歿年月日不詳者は其事蹟を考査して適當按排せり。但操行ありて  
名と事と翳然見はれざる者の若きは、特に編者の哀む所なりとす。

一、編纂に當り得軒野口先生の助言を辱うしたるを以て茲に記して感謝の意を表す。

昭和二年十一月廿七日

編者識

# 種子屋久先賢傳

森友諒  
遠藤家彦 編纂

## 種子島藏人肥後守信基

傳曰壽永文治の  
間襍裾にありと

平氏の亡ぶるや母抱いて北條時政に倚り、其奏請を以て南島十二島に封ぜられ、建仁中種子島に入部し、事に臨拓に従へり。種子島南北十六里東西一里半乃至二三里周回三十六里の一大島なりしも、烟戸疎にして貧しかりしこと田帳に多福島五百町歩とあるにても知るべし。是に於て先づ種子島を區劃して上中下三郡となし、三郡を十數村に分ち、前きの領主、宰府大浦口家の代官上妻氏の舊に依て政を敷けり。當時生産物なく鹿皮を貢するに過ぎざりき。官毎に之を賦恤したりと云へば住民は唯横目縦鼻の徒にして衣食足らず禮節行はれざりしが、信基君以後累代の治績に依り田地を拓き交通を便にし文化を施し人道を進め南海の寶庫と稱せらるるに至れり。其恩澤は固より後世の忘るる能はざる

所なりとす。

下村出羽守時豊

生歿年月日不詳

島主八代長叟君初の事を以て慈愛を祖父時榮君に失ひ、遂に遁逃し江湖に放浪すること六年、流離困頓、辛酸備に嘗めぬ。其間時豊一人隨從し座側を離れず衣食を求めて纔かに飢凍を免れしめ。且慰籍奮勵奨めて挫折せしめず遂に奉じて島に歸り家統を繼ぎ其志を成さしめたり。後油久村を賜ひて之を賞せられき。世人誠忠苦節を稱して割股子推に比せり。

日典上人

應永八年十一月十四日生  
寛正四年四月廿一日遷化

城灣南に去り白砂青松盡くる處巍然として樹つ者上人靈場の碑となす。其の奥一字あり海に臨む之を靈堂となす。上人は實に西之表藏野(川迎)の産にして幼時義賢坊林應と稱し慈遠寺に入り律宗の徒弟となれり。長じて南都興福寺に南山正統の宗乘を學び、遂に勸學院學頭に進めり。歸島の途次

泉州界津に於て警者某の勸に因り尼ヶ崎東福寺日隆上人の門下となり大小權實塔中別付の要法を聞き遂に第一義式の東化妙宗に歸依し其蘊奥を究め淨源院日典と稱し歸島して弘法流布に盡瘁せり。而かも時運未だ臻らず。緇素の憎惡する所となり遂に其私刑に斃れたりと云ふ。期年ならずして法弟日良法印來島遂に三島(種子、屋久、惠良部)一宗皆歸妙法の時運を開くに至れり。故を以て上人は本源寺の開基にして而して日良上人は其の開山たりしなり。

日良上人は淡海の産、本興寺日隆聖人の門下にして日典の法弟なりき。攝州に在るの日互に三島弘法を誓ひ、日典先づ荆棘を開きて播種し、日良其後を承けて耕耘收穫し克く其豫約を履めりと云ふ。

種子島左兵衛尉忠時

應仁二年生  
天文五年十月二日卒

忠時君五世の祖頼時君始めて島津氏と好を修めぬ。茲に至て忠時君太守島津忠昌公に屬して伊東祐國と戦ひ功あり實に文明十七年六月なりき。公之を賞し、諱字を賜ひて忠時と名つけしめぬ。明應六年秋上洛し、射を小笠原備前入道宗信に學び三月許状を受け、全年三月十六日武藏守に任せられぬ。而して弓馬和歌蹴鞠の傳を受けんが爲め京都に在る三年にして四月十八日飛鳥井中納言雅康卿より歌

及蹴鞠の傳狀を賜はれり。永正五年七月洛陽連歌の宗匠宗積法師來島全月五日より七日に至つて忠時君千句を興行し各發句ありき。永正八年十二月太守忠治公に屬し軍功許多なるを以て新地百町を賜はれり。大永四年九月自ら屋久島に渡り楠河及吉田の兩城を築けり。

### 武田筑後守光信

生歿年月日不詳

京師小笠原備前入道宗信に弓術を學び、其秘奧を窮め、明應六年三月二十四日射禮記を受け、一邑に師範たり。本島古式正月大的の式典は君より創まれり。

### 種子島左近衛尉時堯

享祿元年二月十日生  
天正七年十月二日卒

從五位下左近衛將監入道可鈞と稱し、文學を好み尊圓法親王流の書を學び神に入れり。又源信貞を師とし劍術鎗撞棒の蘊奧を究め免許を得たり。天文十年四月七日彈正の忠に任せられ全十二年八月廿五日葡萄牙人來島所持の鐵砲其用奇なるを見て之を學ばんとせり。然れども言語通せず事辨せざりし

に幸に客中明の儒生あり文字を以て之を通せり。時堯君大に悦び是に由り之を聞き熟習して百發百中の功を獲たり。是に於て家臣八板金兵衛をして之を模造せしめ全笹河某をして製藥の法を習はしめ之を海内に傳へたり。先是傳ふる處の鐵砲妙藥の法を國主島津公に稟し、公又之を將軍に稟し、遂に近衛植家卿より御内書を賜ふに至れり。弘治四年二月十七日從五位下左近衛將監に任せられぬ。大正十三年二月十一日兵事に貢獻せしを以て特に正四位を贈られたり。是を以て島民の感激譬ふるに物なく、全年四月八日榕城小學校庭に於て神式及佛式に従り盛大なる報告祭を舉行し、軍國に偉大なる功績を遺し國勢に顯著なる發展を促されたる恩澤を謝したり。

### 八板金兵衛清定及若狹

生歿年月日不詳

素と美濃國關の鍛冶にして刀劍を善くし聘に應し西之表に居住すること數年、天文十二年葡萄牙船來泊し鐵砲を傳ふるや、邑主時堯君清定をして之を模造せしめき。命下つて工を創むと雖も其製法未だ通せざる所あり、苦心慘憺、爲す所を知らざりき。偶船長其愛若狹を戀ふるものゝ如きを覺り、若狹亦策して父を救はんと欲せしを以て遂に若狹に旨を含ましめて結婚せしめぬ。是れ我國異種と婚する

の嚆矢なりとす。若狹志操貞烈堅忍して君父に竭せるは何ぞ其偉なるや。是に於て鐵砲の組織其他の方法を聞き、外形は造り上げたるも筒底の螺旋仕掛は未だ全く聞知するを得ざりき。失望當ならず自及以て君命に謝せんとせり。若狹其窮を察し深く之を心に藏め彼の地に於て「月も日も大和の方ぞなつかしき我二親のあると思へば」と詠じ愆愆として再航を促したり。天文十三年船再び若狹を伴ひ熊野に來れり。船中鐵砲鍛冶の居るあり、若狹因て遂に螺旋の製法を傳へ得て以て父を救ひ君命に答へしめたり。父子の丹誠は言外にあり。明治四十二年七月、中山尙親候八板父子の墓に展し感ずる所あり。石を樹て忠孝碑と題せられたり。

## 笹川小四郎秀重

生歿年月日不詳

天文十二年葡人の鐵砲を邑主時堯君に傳ふるや君曰く、鐵砲ありても彈藥の法を知らざれば益なかるべし、彈藥の製法を教へよと請ひしに、葡人快諾せしを以て秀重に命じ妙藥擣篩和合の法を學ばしめぬ。其より世に流布するを得たり。戰國の世廣く砲術を海内に傳へて偉功を奏せしめたるは亦故なきにあらず。

## 古田御前

生年月日不詳  
天正十七年八月五日歿(年三)

日勝君國上山に狩獵し渴する甚しかりき。乃一茅舎に至り水を乞ひしに、一少女釜蓋を執り之を逆にし枇杓を載せ俯して之を献せり。獵止み館に就き左右に語けて曰へり云々年齒十七八可なり、容姿端正、舉止閑雅、僻幽の地に在つて男女授受せるに手を以てせざるの禮を知る、奇とすべし知らず何者の女ぞと。左右里正に問へり。曰、日翁公生母の裔なり父を黒木道純と云ひ家計の故を以て此に寓居す夙に貞淑を以て聞ゆと。君大に悦び道純を召し旨を告げ、納れて側室に置けり。己にして公子を生む即日恕公是なり。女謂く、方今戰國公子亦將に武を中國に競ふべし、聞く中國互寒爪を墮すと、宜しく島中最寒の地を撰ぶべしと。即古田に假館を設け移居して養育せり。漸く長するに及び或は寒夜竹槍を振ひ、或は霜晨木劍を試みしめ、其心身を鍛煉し徒に愛に溺れて義方の失せざらんことを期せり。後年日恕君の武名赫々たるもの蓋職由する所ある也。惜いかな名を失せり。世人唯古田御前と稱し母鑑となせり。古田區民遺跡に碑を建て、春秋の祭祀を行ひ追慕す。

種子島左近太夫久時

永錄十一年十月廿八日生  
慶長十六年十二月廿七日卒

生母古田御前の訓育を受け勇猛能く祀寒に堪へたり。天正八年秋肥後矢崎水俣の役、久時君家士を遣はして従軍せし功を以て太守家久より諱の字を賜はりぬ。同十一年太守公田布施の遊獵に従ひ大猪を捕へて刺殺せり。時に歳十六なりき。公其勇を感じ鎧一領を賜へり。同十四年七月岩屋を攻むるや、敵城門を開き防戦するを以て自ら強敵を撃取り首功を立てたり。是れ十九歳の初陣なりき。同十七年左近太夫將監に任せられ、同年十一月飛鳥井大納言雅繼卿より蹴鞠の免狀五通を得たり。同十八年大閤秀吉小田原を伐つや命に因り鐵砲二百挺を献しぬ。曩きに肥後龍造寺隆信を攻るや家十某太守公の命を奉じ鐵砲を發し奇功を奏し衆目を驚したるを以て是の命ありしならんか。文錄元年秀吉諸將に命じ朝鮮を征し、特に命ありて島津氏に屬し従軍する前後四回朝鮮に赴き戦功拔群、明の水帥と戦ひ十數の矢創を負ひしも屈せず、鐵砲を發し百發百中敵の弓手は盡く斃れ退却したり。其際矢創の血痕ある肌着は長く傳へて種子島家の重寶に備へられたりと云ふ。

泊 如 竹

元龜元年 月 日生  
明曆元年五月廿五日歿

屋久の島たる、山や嵯嶮、水や清澄、碩儒如竹の若きを出せり。如竹は安房に生れ、幼にして本佛寺に入り僧となり、後出でて鹿兒島大龍寺文之和尙に就て經學を學び、伊勢の猛將藤堂高虎薩摩の太守嶋津光久及琉球王尙豊に聘せられ、或は侍講となり或は師傅となりて重用せられ、國政に貢獻したる功績亦没す可らず。後大阪に至り經筵を開き儒學を講ぜしが再び嶋津侯に召され晩年に及びて致仕して歸島せり。翁は卒直にして浮華を好まず、一生を通じて經學の徒となり、琉球より其親族子弟に與へし家訓の如きは諸人の遵守すべき一大經文なりとす。而して薩摩琉球にて貯へ得たる金銀は公共事業の爲め悉く喜捨したりと云ふ。初め文之が倭訓四書新註未だ世に行はれざりしが明應二年九月其卷尾に跋し梓に録して世に出せり。所謂文之點是なり。翁は實に僧にして儒なり。是を以て世人屋久島聖人と稱せり亦宜なる哉。



肥後休兵衛英信

慶長十三年七月十一日生  
天和三年五月 日歿

和歌に巧みなりき。故を以て忠時君の寵遇を得、花晨月夕其左右に陪侍せり。忠時君卒するや色即是空の四字を冠して哀悼の歌を詠せり。空字歌人口に膾炙し聽者皆涙を墮さざるなかりき。

上妻七兵衛隆直

寛永九年十月二十六日生  
寶永四年六月 八 日歿

當時に於て文學界の第一人者なりき。邑主山栖君の命により正御一家（嫡流男爵家）庶流分派を考査し、嫡流御系圖一卷、家譜一冊、文書寫一冊、庶流系圖一冊を撰し、之を御文書所に納めたり。（寛文十一年起稿延寶五年脱稿）又元録二年懷中島記を撰しぬ。（本島重要記事なり）文献に資する所頗る多しと謂ふべし。平山立意傳に依れば「寶永四年上妻七兵衛隆直より伊勢流有職の皆傳を授けらる」の條あり以て其の有職に精通し當代の泰斗たりしを知るべし。曾孫七兵衛宗弘鎌倉流馬術を川上親純に學び、明和五年印可皆傳を得て子弟に教授せり。

小田宗意

生歿年月日不詳

山栖君の命を奉し京師に遊學し業成りて歸れり。後命により大學を大廣間（大廣間）に講義し家中の諸士をして聽聞せしめぬ。實に天和三年十二月三日なりき。領主の講經を正寢に聽れしこと此より以前之ありしや否やを詳にせず。此に至りて諸士一人だに殘さず悉く定日の四つ時分（午前十時）より出頭聽聞せしめ以て恒例と爲されたり。

名越治十郎

生歿年月日不詳

小田宗意の後を受け、命を奉じ日を定め課を分ちて四書を正寢に講せり。此より學術彌よ盛なりしと云ふ。

種子屋久先賢傳

一一

### 下村新九郎時兼

寛永八年 月 日生  
天和三年閏五月十三日歿

幼にして僧と爲り京師に遊び、後還俗して山崎闇齋の門に入り、従ひて東都に至り苦學數年學業大に進みたり。栖林君召還して十藉に復せしめ儒臣を命じぬ。山栖君の遺制に違ひ同僚鮫島意春と共に經を正寢に講ぜり。

### 大瀬助兵衛道廣

萬治二年三月二十日生  
寛保元年九月十五日歿

西之表上石寺の産、後蟹泊に移れり。無双流武術を日州來島の人佐藤兵衛に學び、實に出藍の技ありたり。延寶七年皆傳を得て、子弟に授けぬ。門下凡八十餘人鮫島諸右衛門同源七は其高足なりき。栖林君の爲に拔擢せられ姓を大瀬と賜ひ兵器卒長とし録一石及太刀廣國を賜へり。子孫道章道繼道長道相傳承し、家聲を墮さず以て維新に及べり。

### 種子島彈正久基

寛文四年九月六日生  
寛保元年七月十六日卒

栖林と號し幼より文武の嗜あり、本心鏡智流の槍術を修め、山鹿流兵法の蘊奥を極め、薩藩の宰たる二十年。學を興し、武を勵み、賢を擧げ、能を任し、綱頰を振起し、政化を更張せり。是に於てか一藩靡然として賢才と稱せり。宜なり我目分明記と云ふ一書を著し、施政に參考すべき事項は細大洩さず統計表のごときものを座右に供せられたり。注意至れり盡せりと謂ふべし。曾て郡吏胥國分の原野を開墾するを策するものありしが衆水利の乏しきを以て之を難せり。君曰く原野を開くは百世の利なりと。自往いて其地を検し吏胥老農と商議し、工を鳩め役を興し數年ならずして沃田數百頃を得たり。殊に甘薯の如きは民食に資すべきを聞き、苦心焦慮、琉球より取寄せ領地石寺の老農休左衛門に試殖を命じたり。土地の確確なるにも拘はらず能く繁殖し水損旱害をも受けざるを以て本島は勿論全國に傳はり爾來饑饉に病むもの尠きに至れり。其功績千載滅びすと謂ふべし。島民社に祭りて尊崇する亦以ある哉。

下村新左衛門時之

寛文五年二月朔生  
元文二年八月四日歿

瑞庵と號せり。儒にして醫なりき。名越治十郎と共に小田宗意の後を承け山栖君の命を奉じ經を正寝に講せり。

羽生立都能立

寛文五年十月十九日生  
享保八年九月十九日歿

幼にして痘を患ひ兩眼明を失ひ風光と生を隔てぬ。乃東西兩都に遊びて雅樂を學べること二十年。正徳二年正月一日擧げられて檢校惣別當に任せられ。享保二年九月二十日藩主島津侯命して旗下士に列せしめ樂師長となせり。世人稱して羽生檢校と云へり。又和歌を好み中院大納言通躬卿の門に入り咏歌頗る多し。其東都に在るや土屋相州の知遇を受くる八ヶ年恩寵太厚く歸るに及び侯和歌を詠じて送れり。

向田彦兵衛宗次

生年月日不詳  
寛保元年十二月九日歿

初め紋太と稱し、江戸に遊び星野勘左衛門に就き射を學び、研鑽怠らざりき。元録三年三月十三日肩様(箭數一萬三千筋を放つ俗大矢數と云ふ)を爲せり。依て同年七月六日星野師射術秘傳の免狀を與へき、其中に云へるあり

御手前儀無双之強弓特今年三月十三日肩様被致之處一萬三千放射様仕廻等無殘處尤不珍義ながら達者之段見物の衆中も被申拙者茂令感入未々如何様の願も云々也。

其強弓以て想ふべし。享保十五年門人西村時員の吹擧に依り栖林君の拔擢を蒙り士林に列せり。

西村甚七時員

生歿年月日不詳

向田彦兵衛宗次に射を學び、技大に進めり。後更に鹿兒島にて平田某に就き研究し、秘傳を受け名聲大に揚りぬ。其遠矢の趾南種子村下中にあり。好て強弓を用ひ其弓今尙家に藏せり。

岩河十右衛門時里

元録二年九月三日生  
延享四年正月廿四日歿

享保四年八月弓術を西村時員に、劍術を宮浦時成に學び、各其傳を得たり。殊に山鹿流兵學は之を栖林君に學び其秘奥を得、戰法聞書(秘書)其他秘傳を受けて門戸を張り子弟を教へたり。

河内六左衛門

元録六年生  
明和六年十二月九日歿

玄樺と號せり。多年鹿兒島に於て有川玄庵森勘清に師事し醫を學べり。家貧くして旅裝も儘ならずりしかば女着を縫直して晴着と爲し、儉約を守りて醫師の方へ通學し、毎朝庭の掃除を怠らざりき。木葉は盡く串に差して干燥し、或は朝食炊事の燃付となし、或は夜間之を焚きて燈火に代用し(里人今に至るも爐火の明滅甚しきものを玄樺殿の光りと云ふ)、又邑主御本門顔見せの臺行燈の鑄漏り、油臺の上より油流れ居るを見て冗費勿體なしと思ひ、紙屑を拾ひ置き毎朝之を拭取り、其油紙もて御門の扉餅金と間越の筋金とを拭ふて怠らざりき。たれとて知るものなかりしに、邑主栖林君通行の際、金具の光澤を見、誰の仕業ぞと下問されれば御番所より彼此れ取調べ逐一言上せしに感喜斜ならず

して右様の者は諸役人氣付くべきを緩怠なりと叱らせられて玄樺へは古銀拾貫文を給はりたり。玄樺は百貫文にも相當すべく儉約して學資となし稽古を怠らず、歸島の後には療治も手廣く猶質素儉約を行ひて持高をも買上げたりしが儉約なればとて吝嗇にあらず、一家親類へ其々持高を買増して與へたりと云ふ。

鮫島元甫宗房

寛永二年生  
天明六年六月二十三日歿

意春と號せり。京師に遊び吉川玄龍及堀元興に就き醫術を學び業成て郷に歸れり。治を乞ふ者多く門前市をなせり。嘗曰、吾子孫をして醫業者たらしめじと。人故を問ひしに曰、家道日に衰ふればなりと。鰥寡孤獨及び貧窮者若くは治其効を奏せざる者皆其直を取らざりき。蓋し醫者仁術の語を守れるなり。邑主十九代久基家譜に曰、久時の遺制に遵ひ儒臣鮫島意春等をして經を正寢に講せしめらる。意春京師に學びて儒醫たりと云云と。其儒學に精通したる知るべきなり

平山藤左衛門顯友

寶永六年四月二十四日生  
歿年月日不詳

頗文學を解せり。明和六年邑主二十一代久芳君累世の家譜を増補編纂せらるるや其主任を命せられ、夙夜勤勉十閱月にして成れり。新舊併せて十七冊、薩藩司譜官息長某序に曰へり久芳君の裏に出で顯友の功勞に成る首股遇を得たる歟と。又安永六年始めて記録所（學校）を大園に建てらるゝや君命せられて其奉行（校長）となれり

永照院悦子

享保五年九月二十三日生  
天明四年六月九日卒

邑主二十代久達の長女にして二十一代久芳の姉なり、出で、日置邑主島津左衛門久甫に嫁し。後故有て種子島に居れり、寶曆七年七月七日久芳高三百石を附し、且新郎を建て適意閑居せしめぬ。即自ら稱して變生男兒也と曰ひ、白布乳房を緊縛し弓馬銃槍を學べり、常に二侍女を隨へ、山に狩、海に漁し、又敢て粉脂を事とせず後國上浦田（小字中川に殘礎今尙存す）に卜居し、鯉漁を創始し躬ら從業せり。是を本島鯉漁の濫觴なりとす、土人今尙鯉漁千尾以上に上れば其舊趾に酒を灑ぎ報本の意を表す。之を萬釣祝と云ふ。亦以て巾幗者流の一異彩と謂ふべし。里人永照院様御作と稱する水調數曲を傳ふ。皆鯉漁及浦田を讚美せしものなり。

岩河作左衛門時似

享保十四年九月二十日生  
安永八年十二月廿五日歿

寶曆五年水野流劍術を鮫島宗武に、明和元年山鹿流兵學を平山玄意に學びて各秘傳を得、子弟に授け、安永五年特に命を奉じて幼主劍道の師となれり。又文學あり同六年御文書方係を命せられ、御記録所講談掛助役となり、兵書及儒書を講せり。子時兄孫時省家學を受け相續ぎ御文書方御記録所講談役となれり。

平山柘右衛門清友

享保十九年十月廿六日生  
享和二年九月十八日歿

梅田盛香に槍術を學び、寶曆十三年十月傳書を得、安永六年六月室に入るを以て槍術仕合七卷其他諸秘書の皆傳を受け、師範家となれり。嗣友武友成良友子孫相承け槍術師範家として維新に及べり。

羽生七郎次道期

寛保元年九月二十八日生  
寛政二年六月二十八日歿

實父田上親苗弓術（師東郷實貫）に精し、從て學べり、父其器に當るとなし、傳書を授け其秘蘊を傳へり。安永七年扶持高三石を賜ふて射藝の師たるを命せられ子弟に授けぬ。子平之進能堅父業を繼ぎ東郷實香に學び精研し射法に關する秘傳、弓法書、日置流射手方百六ヶ條目書、矢を箠に盛るの法（極秘）等の秘傳を受けたり。文化五年扶持高三石を賜ひ能く家聲を墜さず、諸士に師たるを賞せられたり。

### 榎本甚兵衛貞昆

延享三年二月生  
文化十一年八月十二日歿

西之表東町の人にして海上貿易に従事せり。毎年琉球に渡航し同地御天田に於て水道を開鑿し同地方民及海上生活者に利便を興へたり。土民之を徳とし今に至るも水を汲むに際し、本土人亦來りて水を汲まんとするあらば必ず先取權を譲ると云ふ。又文化元年凶荒、嶋民饑餓に迫るを以て本島商業の爲め使用せる所有船を賣却し救濟せんことを嶋主に請ひ玄米千九百餘斛を買入れ以て賑恤を謀り爲めに嶋民饑死を免るゝことを得たり。嶋主其功を賞し文化六年六月代々組入士と爲し且世録壹斛所を賜へり。文化七年十月治産に不便なるを以て士籍を返上せんことを請ひ、命に依り二十家格となりしも、同八年六月再命ありて士林に列し船手檢者を兼ねぬ。同十年十月復士林十辭せり。故に又二十家格と

なし世祿を賜ふこと故の如くなりき。

### 笹河彌五右衛門

生歿年月日不詳

西之表港船舶出入の安全を計らんとし、私財を抛ち港外の暗礁を基礎として築堤を修築せり。其賞として上下一領を興へられき。尙木材を運送する筏を創作し其用大に便利なるを以て文政四年七月米八斗を興へられき。

### 平山休兵衛信友

延享四年六月八日生  
歿年月日不詳

幼より祖父玄意の薰陶を受け、長ずるに及び學和漢に通じ、詞華流麗頗る觀るべきものありしと云ふ。嘗て藩主（島津家）歴代歌に擬して、邑主歴代歌を賦したり。後鴻儒宮圓某許して曰へり一萬石優に七十二萬石を駕すと。本島漢文章ありしと雖も粗朴意足に止まりしが、君に至り彬々見るに至りしが如し。定省庵記（孝子彌五郎傳）等遺稿少からず。國分新田水源地水天淵青龍權現碑は君の撰にして清客某潤飾したりと云ふ。

祖父玄意諱は兼當、多藝にして文武習はざる無く、和歌を京師香川宜阿に、兵學を栖林君に、劍を宮之浦某に、伊勢流有職を上妻某に、火術を菱刈、黒木二氏に學び皆其の室に入りたり。

上妻フエ

寛延三年六月二十五日生  
歿年月日不詳

小左衛門定英の長女にして幼より慧悟文字を好み、長して和歌を能くし、筆札及音曲に巧みなりき。藩主島津侯令愛隣子（松春院孺人）の種子島氏に入興するや、實に生後僅六ヶ月なりしなり。召して師傳たらしめき。鞠育愛撫、頗る義方の訓あり。故を以て文化十二年高一石を賜ふて多年の勤仕を賞せられたり。晩年歌人美坐時觀梶原景伯等と唱和し餘生を送れり。一代の女傑松壽院孺人後年の素地は女史に負ふ所蓋又鮮からざりしなるべし。僻遠の孤島百數十年前此の如き才媛を見るは異數と云ふべし。

種子島郷兵衛時盈

寛延三年十一月二十七日生  
文政九年十一月二十四日歿

射を學び日夜研鑽怠らず、安永七年六月北條時胤より射術印可皆傳を受け且指南を許されたり。郷黨

に師表として子孫相承け以て維新に至れり。

美坐六兵衛時觀

寶曆七年三月八日生  
歿年月日不詳

鹿兒島藩士谷山純利（薩藩師範家）に就き和歌を學びぬ。當時仰きて泰斗と爲し師事する者頗る多かりき。蓋本島和歌を以て門戸を張りしは時觀を以て嚆矢とす。

石黒定之進清方

寶曆七年 月 日生  
寛政八年八月廿一日歿

鹿兒島士東郷某に就き示現流燕飛の術を修め、門弟に萬人中の泰斗と稱せられ、皆傳を得て歸嶋し子弟を教授する年ありき。晩年に至り師範家を吉良甚助に譲れり。

羽生與兵衛道心

生年月日不詳  
寛政十二年六月十一日歿

中種子村油久に生れ、土木に素養ありき。寶歴明和の間、命を蒙り隣村南種子村平山の保正となり、

命に因りて長谷隄を築けり。苦心慘澹、勞費を節減し日ならずして舊莖永通路に丁つて周回数百間の堤塘及約一里を離れたる溝渠の工業を完成し、平山數百町の水田に灌漑し、多大の收穫を得しめ村利を計りしこと尠からざりしなり。其功績後世に至りて益顯著、行人をして嘆稱せしむと云ふ。

### 宮之浦半右衛門孝昌

明和二年六月廿一日生  
天保三年六月廿八日歿

示現流劍法を鹿兒嶋藩士東郷藤兵衛に學び其傳を得て歸嶋し、子弟を教養せり。其子孝道其孫能安其業を繼承し師範家となり維新に至れり。

### 阿世知圓右衛門重道

明和三年生月日不詳  
天保九年九月二十八日歿

職を勸農に奉じ、開墾植林其他農事に堪能にして貢獻せし所尠しとせず。且和歌を好み勸農冠字伊呂波歌を作り、田夫野嬢に唱へしめき。往時隨所宅地内適宜の處に凹地を設け、土芥塵埃を集め、腐熟せしめ之を肥料に充てたり。其凹地圓右衛門つばきと云ふ。實に氏の創意に係れり。現時堆積肥料場の之に代るありて煙滅せんとす。父有幸亦老圃の名ありき。遠隔の田畑に假木屋を設け、此れに起臥

して往復の時間を省けり。之を有幸木屋と名づけ後人々に倣へり。

### 羽生六郎左衛門道潔

明和五年五月二十三日生  
弘化二年六月二十一日歿

西之表に生れ、幼より文武を修め、長じて吏務に通じ、主家財政の料理に任じ、又大阪及長崎に役して能く其功を奏したり。寛政四年丸田氏の門に入り花道を修め、文化六年指南免狀を授與せられぬ。文化元年伊勢家に就き故實を習ひ、數條の傳授を受けたり。其文筆の才あるを以て、文化十四年九月主命に因り、故事舊記を探りて主家の年中行事數篇を編輯し、又前年種子島に養蠶業を廣めんことを企劃し、飼養法は勿論、繰糸法、産卵法を教習せしめ、全島の公益となるに至りしを以て文政九年藩主より賞詞を受けたり。後明治十六年十一月有志相謀り碑石を本城先人の塋域に建てたり。

### 下村太左衛門時校

明和五年十一月二十五日生  
天保十五年十一月二日歿

父時邑より稻留流函工傳を受け出藍の名ありき。技愈々進み稻留流本家鹿島氏より傳書を授けられ、藩主島津氏切米年十八表を賜ひ、御兵具付を命せられたり。又水野流劍術を鹿兒島士東次郎左衛門良



賢に學び皆傳を授け郷黨に師範たりき。

久保平内左衛門之友

生歿年月日不詳

薩藩士也。罪を藩候に獲て西之表花里に幽居し、遂に謫居に病死せり。性忠愨嚴正、文武の材幹ありき。謫處尙子弟に藥丸流劍術及習字（筆札に巧にして顏魯公の遺意ありと云ふ）を教授し、風化一郷に及べり。嘗て日新公伊呂波歌注解を著し之を故郷子弟に贈り庭訓とせり。文辞叮嚀忠孝を勤め節義を礪まし、字々肺腑より出でたり。故を以て當時相傳へ、家家争ふて之を手寫せりと云ふ。先帝東宮に在すの日吾鹿兒島に行啓し玉へり。縣方物を献せしに内に日新公伊呂波歌注解ありき。死して餘榮ありと云ふべし。

日高文左衛門實本

生歿年月日不詳

本藩の師範家加藤權兵衛に就き、天真流を學び、其濫奥を極めたり。偶先生失明せられたるを以て高弟種子島十郎太夫に差圖し、竹内流腰之廻日流鎧組討天真流劍術の皆傳を授けられたり。歸島して

子弟を教授し、寛政九年實子幸兵衛實有に右傳書を與へ、子孫相繼で師範家となり維新に及べり。

種子嶋五郎左衛門政賢

生歿年月日不詳

本藩師範家梅田九左衛門に就き本心鏡智流鎗術を學び技能衆に冠たり。因て門人異名を種子五郎と稱し畏怖したりと云ふ。文化二年十二月鎗術の濫奥を受けたるを以て扶持米五石を轉じ永代高として師範家たらしめられたり。文化十年十日鎗一柄を與へられぬ。是鎗術を梅田家に學びて盡く其傳を得老年に至て益怠らざりしかば梅田家之を感じ遂に官に聞したるを以て賞せられたるなり。

鎌田彦右衛門

生歿年月日不詳

中種子村野間竹屋野の人なりき。好學篤行、里人皆其の徳に化したり。人情敦厚風俗朴素墻々鬩争の聲なく、家々囂訟の音を聞かず。道路瀟洒、一郷穆如たりき。其の風化此の如くなるを以て時人竹屋野聖人と號せり。

遠藤壯兵衛季伯

生歿年月日不詳

謙牧と號せり。年二十一、事を以て致仕し屏居客を謝し文武を講究せり。後薩藩士加藤清風より天真流劍術竹之内流組討の皆傳を受け。安永六年始めて記録所の設けらるゝや講談役となれり。文武の子弟多く田上方錢は其の高足なりき。遺作神社縁記あり。子森右衛門季敏父業を承け加藤家皆傳講談役となり、子弟を教養せり。季敏の子壯兵衛季泰亦加藤家皆傳講談役となり子弟多く西村碩園の父大塊亦嘗て贊を執れり。且邑主の命に因り武道の師を奉せり。季泰の子に家彰あり。

家彰謙太郎と稱せり。父祖の業を繼ぎ加藤家皆傳を受け邑主の師となり、又文武兩道を以て子弟に臨み業を受くる者多かりき。文久年間松壽院孺人諸子瀨に波止場を築かるゝや檢者を命せられ、吉良氏章と共に専ら其任に當れり。明治維新後戸長となる數次、種子島中學校教員在職中歿しぬ、明治十三年二月二日なり。

吉留傳平

生歿年月日不詳

西之表東町の人にして庄司浦彌五郎と天明の二孝子たりき。藩侯及邑主より米錢を賞賜して旌表せ

られぬ。家商賈を業とするを以て温涼定省を躬らする能はず、常に妻子を戒めて色養の道缺くる無らんことを力めたり。母酒を嗜めるを以て毎に一酒壺を設け酒を注かしめ置くこと數十日、後更に之を他壺に移し以て需めに待たしむ。家人其故を知らず、後其の酒壺を檢するに朝鮮人參若干を沈め浸して以て滋養に資せるを知り、皆其純孝に感ぜり。嘗て琉球に航せんとするや母年己に九十或は頽齡歸期を俟たざることを懼れ乃日典廟に祈願して曰へり、小人歸期に及ぶ迄願くば老母をして恙なからしめ玉へ即養するに鴨川に橋を架し參廟又は行人をして徒涉の難を免かれしめんと。己にして航し半歲にして歸れり。老母健在則私資を以て鴨川に架橋し其誓を申べたり。後老母年九十六を以て歿しぬ。後人孝子傳平碑を其宅趾に建てたり。

彌五郎傳製婆

生歿年月日不詳

現和庄司浦漁家に生れ母に事へて至孝、嚴寒に至れば衣衾の不足なりしを愛ひ、多量の薪を集めて爐中に焚き(里人此より爐火の盛なるを彌五郎焚きと云ふ)室内を温め甘旨を供へ耳目を喜ばしめ、心を盡して奉養し、一に承歡を以て念と爲せり。一女あり製婆といへり。亦孝順父に類せり。是を以て一家和樂、春風の如くなりき。郷人其孝養に感じ、みな之を師父視せり。然れども謙抑敢て自ら居

らす、常に人に謂て曰く小人茅を刈り蓬を編み以て自活することを得るは邑主の恩なりと。因て毎年蓬二十枚を献せり。邑主其行爲を奇特とし、寶曆十四年六月米二石を賜ひぬ。既にして之を藩主嶋津氏に禀し、嶋津氏亦明和五年正月藏米六石を彌五郎及袈裟に頒賜し以て之を旌表せり。是に至て父子の孝義郡國に著れたり。其後祖母に事へ孝養なりとて島津公より三百疋邑主より百疋を袈裟へ賞與せられぬ。後年現和小學校長其孝義を慕ひ青年會及婦人會と相謀り碑石を校庭に建てたり。其撰文中に曰く、嗚呼誰か彌五郎を不學と謂ふか其子職を盡して自然禮に合し範を後世に垂れ以て綱常を持す學士太夫と雖ども企及ふ能はず崇尙せざる可けんや云々と。宜なる哉。

吉 良 見 龍

生 年 月 日 不 詳  
天保十年六月二十九日歿

薩藩の名家大木赤崎二氏に就き醫を學び造詣頗る深かりき。日瑞君命して掌七とせり。本島掌七の職之を始めとす。嘗唐船(支那船)の漂來すや客中病人あり之を治して効驗ありき。客中陳相准と云ふ者あり、大に之を徳とし且其方伎に感し詩を賦し贈り以て謝意を表せり。子元民、孫倉平相繼いで家聲を墮さず以て明治初年に及べり。

田 上 市 郎 義 福

安永二年三月九日生  
嘉永六年九月十八日歿

儒學を鹿兒島藩士向井滄浪に、和學を同谷山純清に學び師事研鑽遂に一家を成し歸來郷黨に師表たり。又射を羽生某に、劍を宮之浦某に學び各其傳を得。御文章係及講談役(學校教師)を命せられたり。文化七年近習役を以て能く幼主を輔佐し教育宜しきを得たるを以て嘉賞せられき。義福の子青山名助一諱貞則父業を繼ぎ學校(已に學校の名あり)講談役及侍讀を命せられたり。明治九年本島始めて女學校を設くるや其教員(校長及教頭格)となれり。嘗て京師に遊び飛鳥井大納言雅久卿に就き和學を學び、後歸り帷を下し子弟を養ひしに、弟子大師匠小師匠と稱し父子を別ちしと云ふ。

平 山 傳 一 郎 武 世

安永三年三月十日生  
弘化四年四月廿一日歿

西海漁史又は五樂陳人と號せり。享和元年七月笈を負ひて京師に之き。佐野少進寺島俊平の門に入り經學を受け、餘暇には中林竹洞に就き書を學べり。又摩島松南梅辻春樵諸大家と交善く、其遊學中

著す所の詩什漫遊詩稿と稱し詩名當時に鳴れり。其他遺著數種家に藏せり。文化元年業成り郷に歸りて耆老と相謀り、子弟をして社を結び文武を勵ましめぬ。之を郷中と稱し、大中小の三種に分ち、六七歳より廿五歳迄は郷中に加盟するの義務あるものとせり。是より組入士間に文學大に普及したり。

實子寛藏武肅椒垣と號し、穎敏強記にして頗る理財に長じ、又詩歌文章の造詣深く詩客の請に應じ詩歌文章を添削するや瞬時にして完成せり。當時の金石文は概して椒垣の撰に係れりと云ふ。

### 知覽才兵衛行寛

安永四年十二月廿一日生  
天保十一年六月廿二日死

理財の才に富み、農商の業に通じ、勸業掛を命ぜられて經營百端、本島に於て砂糖製造の有利なるを認め、島主の府庫を充さしめんが爲め、藩主に請ひ、甘蔗の種苗を取寄せ、農家には必ず限定以上の反別に植ゑしめ、徳ノ島及大島より教師を聘して砂糖を製造せしめ、之を御勝手所に買上げ、毎年大阪に出荷して販路を計り、本島の利益を得たり。其功に依り文政十年十二月永代高十五石を賜はれり。更に製造數量増加の出願に盡瘁し、功勞渺からざるを以て文政十二年五月高十石を賜はり、續いて全年六月砂糖廿五斤入小樽一挺永世下賜すとの賞を得たり。

### 牧瀬安兵衛國命

生歿年月日不詳

鹿兒島刀匠の名手奥國平に師事する數年、遂に其秘奥を極め、師より國字の名を免許せられ國命と號せり。光彩陸離銳利毛を吹くべし種子正宗の稱ありき。子則房父に就き學びて出藍の譽あり四郎作と稱せしは是なり。

### 木原靖共

生歿年月日不詳

文政天保の際。崎人木原靖共あり稱して半六公と云へり。獨居家眷なく頗る文字ありき。蓬頭粗衣、門を閉ぢて書を読み門を出でて酒を乞ひ放言世を弄べり。嘗て自ら地球儀を製し、歷々として歐米諸洲を指示し且天下の大亂を豫言せり。常に兒童を視るや頂を撫して曰へり、憐むべし兒童髪遂に截らるべく、且死所を知らざるべしと。人以て狂となし信を置く無かりしと云ふ。好で詩を作り每首東韻を用ひたり。因て一東先生と呼べり。

### 鮫島貞伯資余

安永五年十月九日生  
文政三年四月廿三日歿

醫を業とし、研鑽の傍鹿兒島藩士坂本後太郎清胤に師事し金子流体術を學び、享和三年正月秘傳を受けて一郷に師範たり。邑主日瑞君前後永代扶持高三石及錢十貫文を賞賜せられぬ。養子貞哉父業を繼ぎ家聲を墜さず明治維新の際に及べり。

西村四郎八政体

安永六年二月五日生  
寛政十二年八月二十日歿

寛政五年坂本清胤に性一流劍術を學び、技倆精煉大に進めり。同十二年二月遂に免許皆傳を得て子弟を教養せり。年二十四、不幸短命是年八月病死せり。其危篤なるや家人枕を擁し歔歔哀痛、聲頗る漏れたり。即目を瞋らし、曰丈夫豈に婦女の手に死なんやと、蹴起別室に赴く家人踵き到れば已に斃れたり。

日章上人

生年月日不詳  
弘化二年十二月六日遷化

南種子村上中に生れ幾もなく北花里に移され人の手に乳育されぬ。幼にして慈園寺三十一世正行院日普の弟子となり、字を智恩と命せられき。出でて上國し細草談林に在り其化主と爲り正壽院日亮と

號し後日章と改めぬ。郡家妙京寺住職、大隆寺第十八代住職を経て遂に尼ヶ崎大本山本興寺本能寺兩山七十九世貫主となれり。(本興寺事務所よりの歴譜の寫に據る)後人傳へらく上人若かりしとき俊傑未だ嘗て尊貴の前に屈せざりしが一日島主に見ゆし時自ら平身低頭頗る謹肅の色を表はせりと。

美座庄左衛

生歿年月日不詳

初め園田與藤次に就き兵學を學び、其傳を受けたるを以て文政四年邑主より褒詞を受けたり。其子源助時貞箕裘の業を繼ぎ、軍法を園田氏に學び其の蘊奥を得たり。弘化四年十日其賞として朝服一領を與へられ是より子弟益進み業を受くるもの多かりき。邑主久尙家譜に曰く元治元年十月六日美座源助時貞をして布兵の法を演せしめ、久尙親蒞す、演畢て之を褒し且金一方を其門人に與ふ。是日祖母夫人母夫人亦簾を下して之を觀る云云と。

渡邊勘右衛門直

寛政七年正月廿三日生  
天保七年十月六日歿

竹亭と號せり。幼より書を讀み尤も詩を好み揚誠齋に私淑し造語陳腐なく往々人を驚かすの句あり

き。其大阪に在て祇役（物奉行即會計）するや、文簿に執筆するも敢て詩を廢せず。尙能く清新奇艷の句を出して一時の才俊と贈答せり。藝の頼杏坪、坂の篠崎小竹、京の摩島松南は文辭の師を以て待ち後藤松陰、澤春耕輩の如きは皆其の唱和の友たりき。稱して一島の翹楚となせり。又經世濟民の才ありて甘蔗の有利を室老知覽某に建策し之を庭園に試植し製糖師を喜界島より聘して自宅に置きしが如き本島の糖業は實に端を此に發せりと云ふべきなり。疾を以て鹿兒島より歸るや、松濤院孺人爲に藩侯に乞ひて侍醫をして護送せられたり。特に其待遇の尋常一様に非ざりしを知るべし。

### 西村源左衛門時民

寛政八年正月五日生  
明治廿年四月廿日歿

遊山と號し、文化十二年十月弓術を東郷長左衛門實孝先生に學び其傳を得たり。又祖父休四郎時庸の業を繼承し炮術を學び弘化二年二月師範家末川主税久長より其傳を得、公より賞金二百疋を賜れり。

### 長野良左衛門武清

寛政九年三月三日生  
文久二年正月十二日歿

日置流弓術を羽生能堅に學び、後東郷實孝に師事し卷藁前一卷矢初等の傳を受け、又神心流柔術、水野流居合を上妻宗允に學び皆傳を受け、子弟に授けり槍術は則ち種子島時兼を師とし十六才にして己に中極意の域に達し、壯年梅田盛苗に就て奥之手等の傳を得、其直心影流劍術最心血を灑ぎし所に於て、坂口兼定に就て之を學び、傳受取次の免許を得たり。邑主久道君命して一郷に師範たらしめぬ。然れども尙以て足れりとせず、文政八年五月江戸に遊び、其祖家長沼萬郷（四郎左衛門永井侯家臣）に親炙し、其指導を蒙り造詣頗深く歸郷其門に進むも益多かりき。又餘暇を以て伊勢貞長に軍禮、及故實を修め傳授する所ありたり。

### 種子嶋隣子

寛政九年三月十八日生  
慶應元年八月二十日卒

松濤院様と云へり。藩主齋宣公の女にして邑主久道君に嫁しぬ。才識明敏、事を處すること果決、人を使ふに器を以てし、寛厚慈愛、鬚男子と雖も如かざるものありき。不幸にして屢種子島家の長君なきに遇ひ、島政を聽くこと數十年、常に民の爲め利を興すを以て己の任となせり。役人に諭されたる文章の如きは優長にして眞摯世人の嘆賞する所たりしなり。曾て南種子村大浦川の川下游塞し、潮滿れば渉るを得ず田地も潮に浸されて荒れたるを夫々巡覽して川直しを爲し、古田の汐人を防ぐと共

に三十餘町の干瀉を塩田と爲さんことを思立ち、役人を鹿兒島に遣し其方法を研究せしめ、經年百端、安政四年正月より工事を起し今年十月竣功し御手元金二百八十五兩を支出せられたり。汐入田地災を免れて收穫多く村人の悦、譬へんに物なかりき。而して同所に塩田を開き、萬延元年に至り更に出水より塩子及石工を雇入れ、塩田の擴張を計り製造法を改良して陪舊の收穫を得、塩の不足なりし本島の供給を充し、屋久島に賣出すに至れり。誰か其徳を仰がざらん。進んで西之表港波止新築の志あるや、費用の夥しきと工事の容易ならざるとに苦慮せられたり。川直し及塩田等に手元金は已に盡き、又倉庫を空費せんことを恐れ苦心慘澹、藩主の補助金を仰いで此業を成さんと決心し、遂に三年間の繼續事業として一年に四百兩宛の補助を得たり。因て地方檢者にして吏務に練れたる野元某を請ふて總宰たらしめ、萬延元年起工し文久二年竣功せり。實に新波止長四十二間餘横十二間、舊波止増築長八間餘横六間なり。爾來船舶は安けく平けく其中を出入して交通益開け、文物益進みたり其恩澤の大を得て言ふ可らず。其他天保九年松濤菴を熊野山に建て、安政四年、慶長役に於ける本島民の殉難戦死の招魂碑を建て、文久三年栖林大権現と稱し甘諸傳來に障功を奏したる久基君の靈を奉祀し、其他大日本史百卷を郷校に寄贈したる等、凡そ國利民福を計り慈々たること仁君賢相も如かざるなり。宜なる哉、島民今に其徳を仰ぐことや。

## 前田新五兵衛宗誠

文化四年二月七日生  
明治四年十二月十一日歿

役心或は中洲と號し、義兄平山西海、實兄前田紫州等の郷儒に就き文學を修めぬ。蓋我鳴文學の精華は文政天保の間に在り、其間諸儒繼ぎて堀起し中洲亦其中に列せり。京阪の諸大家に交り批評を請ふたる詩文の稿抄からず今家に藏す。文久二年八月十五日室老上席となり西之表港埠頭石壘築造を監督し三年の勤勞を賞せられ畫幅軸及田二反六畝十八歩を賜はれり。

## 平山優子

文化六年三月二十一日生  
明治廿七年十一月十四日歿

藩士平山武伯の配にして學を好み和漢の史傳に涉り尤和歌を善くせり。嘗て年小山陽遺稿を讀む、稿中六拍水調の語あり、解する能はずして議論百出せり。偶女子之を聞きて曰く、俗に云ふ六調子是なりと。其博識此の如くなりき。明治二十年本縣知事渡邊千秋部を按して來り女史の名を聞き見んと欲せしに老を以て辞し贈るに和歌を以てせり。千秋見て大に感じ任滿ちて東都に歸り宮相となるや之を典侍稅所敦子に告げぬ。敦子歌を女子に徵せり即舊詠を書して贈れり。曰。

和田の原八十島こゆるとしなみの

かひある御代にあひにけるかな

と。敦子嘆賞措かずして之を

皇后宮乙夜の覽に備へたりと云ふ。

### 山田歌子

生歿年月日不詳

京都に生れ、和歌を景樹先生の門に學び、後同門下薩藩常府の士山田一郎右衛門に嫁せり。一郎右衛門任滿ちて歸るや從て而して鹿兒嶋に棲めり。偶嶋津家相續の内訌あり、爲めに一郎右衛門割服したるを以て藩廳は其騷擾の上國に漏洩せんことを恐れ、歌子をして種子嶋氏賢夫人松壽院の歌友として慰安せしむるの得策なるに如かずとせり。歌子其勸誘を容れて來嶋せしに、蒲柳の質なりしを以て松壽院夫人柳田某女をして其侍女と爲し、歌會其他の外出には必ず保護する所あらしめたり。而して當地の歌法は當時尙二條家を固守せるを以て歌子の歌風を批評し痛く添削を加へたりしも忍容其徳を渝へざりき。其後景樹派の傳はるやき嚮に妄評批抹を下したるもの大に之を愧ぢたりと云ふ。明治に藝り歌人の組織になれる彩雲社、發企となりて歌子の墓に貞石を建て以て禮敬を表せり。

### 柳田來鳳友温

生歿年月日不詳

玉川又は柳温と號せり。幼にして一鍛冶の養子となり磊落不羈、家業を移めず文學を好み詞容と交遊し諸藝適くとして可ならざるはなく、最書畫に長じ世人争ふて揮毫を需めたり。坂井熊野神社々務所に保管せる松壽院夫人の肖像及親戚の某家に秘藏せる鯉魚の圖の如きは世人今に之を嘆賞せり。某家の珍藏に三猿猴の密畫あり、後人之を狙仙の筆なりと稱し、骨董家の來嶋する毎に之を割愛せんことを請ひしも主人應せざりしが、遂に百余金を出して購ひ去るものありて轉顛數千圓の價格に上れりと云ふ。東京に出づるに及び精密なる鑑定に依り初めて擬筆ならんかとの評ありき。蓋し本畫はもと來鳳の揮毫なりしが如し。又飄然漫遊を試み奥州松嶋に到り金華山に上りて足を留め、歸家の後某家の欄間に大阪住吉神社の風景を刻し、細密雅致眞に逼れりと云ふ。

### 子島猪右衛門時廉

文化六年五月廿五日生  
明治廿五年一月卅一日歿

俳句を好み山水と號せり。嘉永の頃薩藩十伊地知馬騶（江戸田川鳳朗の門人、別號馬翁）に學び造



詣頗深かりき、歸て之を郷黨に唱へたり。初め本島俳句者ありしと雖も未だ統制する所なかりしを以て亦甚だ振はざりしが是に於て勃然として興り。文壇更に一旗幟を樹てたり。

吉 良 甚 助

文政四年四月 十日生  
萬延元年六月十二日歿

鹿兒島士伊集院嘉盛に師事し示現流劍術を學び其の秘傳を得指南免許を受け以て子弟に教授せり。

榎本新次郎貞寛 別號驢齊

文政五年 正月八日生  
嘉永四年十二月朔日歿

壯年上洛、廣瀬旭莊に師事し學ぶこと年ありき。旭莊著す所の日間瑣事録に曰く、驢齊聰敏恭敬才德雙全予門人數百千人未だ其比を見ず。以て其人と爲りを知るに足る。又醫を京師の名醫花岡某に學び業成りて歸るや組入士に列せられたり。初め祖父擢んせられて組入士となりしも之を辭し二十家格となりしが驢齊に至て其寵光を復せり。嘉永四年八月滯慶中なる久道公未亡人松壽院夫人特に招請して係醫となせり。

西村休八時乘

生 年 月 日 不詳  
慶應元年 月 日歿

天保二年、日置流弓術を東郷實徳に學び傳受する所ありたり。文久三年十二月十五日萩原流鐵砲術を萩原安重七代砲孫野村彦兵衛延綱に學び、秘傳免許皆傳を得て郷里に教へぬ。  
子守八、直心影流劍術を野村綱命十二代隈元道善に學び技術精煉免許皆傳を受け、父業砲術と共に併せ子弟に授け一郷を風靡し以て明治維新に及べり。大正二年死。

吉良 太郎氏章

文政七年三月十八日生  
明治九年一月卅一日歿

少壯劍を學び、槍は則梅田氏に師事して妙技絶冠と稱せられき。已にして節を折つて宮内卿二氏に就き經義を承け、遂に郷里庠序の督學となれり。後賢を避けて前田豊山に譲り其部下に立てり。資性剛直、純にして朴、頗世に重ぜられたり。自奉する簡素、粗縵袍を衣、頭髮結ぶに藁を用ひき。子弟竊に子路先生と號せり。其歿するや子弟碑を建て其徳を慕へり。平山某文を撰して六事を表せり一曰槍術冠時二曰、折節讀書、三曰、出納明晰正時流四曰督學創術、五曰讓賢着下、六曰指導得宜と。

鮫 島 新 藏

文政七年八月十八日生  
明治卅三年五月廿六日歿

頗經義に通じ、吉良氏章と共に郷學の師となれり。最稼穡に長じ、常に書を帯び粗衣短葛、躬ら隴畝に耕し、田夫野老と伍せり。然れども風丰莊重自づから長者の風ありき。郷黨皆曰く晴耕雨讀とは夫子を此れ謂ふなりと。資性朴素簡點、濫に言はず言へば必肯啓に中れり。奇行逸話の傳はるもの多し。

砂 坂 孫 左 衛 門

文政九年二月八日生  
大正元年十一月七日歿

南種子村西之砂坂の塩子にして一丁文字なく而かも公共心に富み、西之より島間に通する路線の迂路にして交通不便なるを憂ひ明治初年より新道開鑿の事を主唱し、東奔西走其利害を説き、遂に幾多の賛成者を得て、全五年開鑿の工事に着手し、纔に深濱方面に通ずるを得たり。爾後全八年再び工を起し、刻苦經營、十年八月十二町餘の里程を竣工し、村民の利便を興ふるに至れり。其成績著明なりとす。是に於て全二十二年二月四日日本縣知事より賞金拾圓を下賜せられたり。

羽 生 慎 翁 道 則

文政九年二月二十三日生  
明治三十四年二月二日歿

人と爲り多藝多趣にして、鑑識を有し記憶に富み衣冠を齊へ起坐端重、器具整列殊に茶花の兩道に於る之を天より稟ケ通神の妙ありしと云ふ。天保十二年三月伊勢家に就き故實を、丸田家に就き池之坊流花道を修業し、同年十月二十日伊勢家より産弓鳴弦の傳授を受けたり。爾來花道及茶道の修業及傳授をなし、明治八年京坂及東京に遊び、同年六月家元四十二世專正師より生花傳法皆傳立花數ヶ條の傳授を受け、花定式會宰となり、花道指南に任ぜられたり。同二十年九月大日本總會頭職兼花道教授に累進し、同年十月宗匠代理として東京出張を命ぜられ、遂に家元東京出張となりたり。當時東京には殆んど此流なかりしを以て粉骨碎身弘布の任に當り、數年ならずして東京市及近縣悉く風靡して此流儀を學ぶに至れり。因て門弟中花道の教授を以て身を立て家を成す者數百名を出し、以て今日の旺盛を極むるは皆翁の功績ならざるはなし。是に於てか門弟等相謀り碑を高輪泉岳寺境内に建て翁の遺績を後世に傳へたり。宜なる哉。

菊 池 竹 菴

文政十二年生  
慶應四年閏四月六日歿

年五歳にして僧となり後上洛して東漸寺の役僧となれり。人と爲り倜儻、氣概衆に超む大志を懷き、柔術は澁川流、薙刀は齋風流の奥義を極めぬ。又文學に長し書を善くし外典に通せり。偶暮末に當

り志士京都に集り天下の風雲愈急なれば僧侶の身として尊王攘夷を唱へ正義を鼓吹して東奔西走し、勤王の士を我寺に養ひ、討幕の師に加はらしめ、自ら奮然として従軍し、能く京阪の訛に通じたるを以て偵察の任を帯び屢危険を犯して感状を賜はりたり。遂に幕軍の知る所となり上總五井驛に於て殺されたり。時に年四十。

美座七郎右衛門時資

天保元年六月九日生  
明治十年一月拾七日歿

幼にして文墨を好み鋭進速達詩文を善くせり。餘暇には書を學び世人の需に應じて揮毫し三山と號せり。當時の文豪たりき。

羽生助吉能安

天保二年卯十二月廿九日生  
明治三十八年六月五日歿

和歌を好み又書畫に巧みなりき。後殊に俳句を嗜めり。明治二十七年大阪好吟會の起るや其の囑托により支部長となり後進の指導に力めたり。明治三十四年十一月蕉風明倫教會より宗匠に列せられたり。本島人宗匠の號ある是を鼻祖となす。俳名蝸牛舎小礫。

前田讓藏宗成

天保二年三月十五日生  
大正二年九月二日歿

豊山と號し、資性温厚、家學を父に受け後宮内湊々齋先生に就き程朱の學を修め、終生心を教育に竭し郷校及家塾に於て業を受くるもの前後一千有餘名。知名の士を出す亦尠からざりき。維新後舊主の家道窘束するや其孤主を迎へ、啓沃指導經營百端、遂に家道を復興し且授爵の目的を達成し、七百年來名門の聲譽を維持せしむるを得たり。德行卓絶、家庭敦睦、實に一郷の師表たり。明治十一年以來本縣知事の賞典數次に及び同二十六年七月大日本教育會より育英大家として銀製會章を贈られ同三十六年十二月藍綬褒章を拜受し其德行を表せられたり。大正二年九月二日訃音の縣廳に達するや更に金若干圓を贈りて厚く慰弔せられたぬ。又舊主男爵家其功を多とし子孫永世三鱗紋章を使用せししめ且終生養老金として贈與する所ありき。本島人先生と稱するは必ず夫子の事にして世呼で種子島聖人と號す。父十九郎宗恭は紫洲と號し、京攝の間に遊び野田笛浦、篠崎小竹、後藤松陰等と交遊し其詩稿一卷は琉球を経て大清に入り翰林院編修林春溥の矚覽を得たりき。宗恭亦當時の名家たり。

牧平次

天保四年七月七日生  
明治十六年三月十日歿

柔術關口新心流を坂本廉四郎に學び、其奧義を究め免許皆傳を受けて子弟を養成せり。技精妙入神の稱ありき。當時士間角觝の技盛なりしが君亦巧者なりき。衆其對手たるを欲せず、曰彼魔手を交ゆと。是柔術の技を交へんことを懼れてなり。

楯原孫之助長之

天保五年八月生  
明治拾參年貳月貳日歿

榕園と號し、商家に生れ、文學を好み、騷人墨客を友とし、最和歌に長じ又書を善くせり。西町商家の子弟及池田洲崎漁家の子弟は盡く同門下に集り教育を受けたり。晩年京都に赴き渡忠秋の門に入り和歌を研究し造詣甚深かりき。態毛集編纂の如きは概して同人の手に成りたりと云ふ。

上妻謙三宗武

天保八年十月十七日生  
大正三年七月廿九日歿

鹿兒島藩士八田知紀に就き歌學を修め、人となり倜儻磊落氣概衆に勝れ、人格又俗に超ねたり。幕末、尊王攘夷の黨蜂起し倒幕の舉あらんとするや、宗武當時組頭の重任を帯びたるを以て部下を率ひ出兵せんことを謀りたるも、故有つて事成らざりき。遂に王政復古となり、本郡に設置されたる常備

兵の小隊長に推され、其後戸長に任じ、村長に擧げられ、多年村治に力を盡し、激務に在りと雖も坐右に歌書を放たざりしと云ふ。特に心胸を熊毛集歌集の編纂に置きたり。明治二十六年村長を辞し、爾來世事を抛ち風月を樂み歌人の組織せる彩雲社の首腦となり、歌道の奨勵を以て任となせり。當時和歌の旺盛を極めたるは主として其力に由れり。

鮫島和七郎

天保十三年七月朔生  
明治 年 月 日歿

本島の糖業は之を首唱する知覽行寛あり。之を後にして鮫島和七郎の如き篤志家ありき。君明治九年糖業に志し、終身之に従事せり。今榎本農商務大臣追賞狀の全文を掲げ以て傳に代ふ。種子島糖業の衰頹を憂ひ私資を擲て率先甘蔗の蕃殖と製糖の改良とを圖り艱難辛苦十年一日の如し全島の民爲に感奮し斯業に従事するもの多く遂に今日の産額あるを致す其遺績永く芳し仍て特に之を追賞す

明治三十年三月十八日

(金貳拾圓添ふ)

官位 氏名印

中 田 時 懋

嘉永六年二月三日生  
昭和二年一月十三日歿

王政復古の際薩長土肥四藩の壯丁に限り撰出せられたる近衛兵に推され、明治四年出京し期満ちて同士は悉く歸郷せるも氏獨り思ふ處ありて滯京し、陸軍士官學校第一期生となり、明治十年卒業、陸軍砲兵少尉に任せられ、明治十年の役に參加し、平定の後參謀本部に出仕し、東京附近の實測に全力を濺ぎたりき。夫より金澤聯隊等に轉勤し累進して少將となり、日露の戦役に於ては澎湖嶋要塞の司令官として功績ありき。後陸軍中將に任じ豫備役に編入せられたり。

河 内 禮 藏

文久二年九月八日生  
昭和二年二月七日歿

種子島學校に入り、後東京に遊び明治十五年陸軍士官學校に入學、全十八年卒業、陸軍歩兵少尉に任じ歩兵第十八聯隊小隊長に補し正八位に叙せられたり。全廿七年日清の役起るや、朝鮮元山に上陸し、九連城、析木、海城、缸瓦寨、牛莊、田莊臺等に轉戦、全廿八年六月凱旋し功五級金鷄勳章及勳六等瑞寶章を授けられき。全三十七年日露の役朝鮮鎮南浦に上陸、九連城及遼陽各處に轉戦、聯隊の奉天會戰中全卅八年三月紅土嶺に於て負傷後送されて歸京し、翌年功三級金鷄勳章勳三等旭日章を授

けられ、全四十四年九月陸軍少將に任じ歩兵第十五旅團長に補せられたり。大正五年陸軍中將に任じ第二師團長に補し、從四位に叙せられ、全八年七月待命、全年二月從三位に叙せられたり。昭和二年二月七日、訃音天聽に達するや、長くも 聖上陛下勅使二名を差遣され祭祀幣帛を賜へたり。

尾 形 直 十

文久三年十一月十一日生  
明治廿八年十二月廿一日歿

明治十七年三月東京小石川同人社を卒業し陸軍省に奉職し後辞して鹿児島市天神馬場に私立英和學校を設立し自ら校長となり育英に務めたり。實に明治二十一年四月なりき。生徒前後五百名校運隆々實に縣内に冠たりしなり。惜べし四年の後病を獲て閉校し郷に歸れり。後私立種子島學校の教員となり三年遂に逝けり。

西 村 時 彦

慶應元年七月二十三日生  
大正十三年七月二十日歿

碩園と號せり。幼にして郷儒前田豊山先生の門に入り、明治九年種子島學校に入り漢學を學び明治十三年東京に出でて重野島田の二先生に師事し學業大に進む。全三十二年五月大阪朝日新聞社の招聘

に應じ、全二十七年朝鮮、東學黨の亂起るや直に京城に赴き、日清戰爭勃發前に於ける日韓清三國の關係を報道するに務めたり。全三十年大阪朝日新聞の主筆となり、全二十一年清に遊び、全三十二年再遊、留まること二年有餘にして歸朝せり。此より其性行變ぜりと云ふ。全四十三年歐米諸國を巡遊し大正五年懷德堂の再建に盡瘁し理事並に講師を兼ね、京都帝國大學講座を囑托せられたり。全九年講師を辞し其前年には大阪朝日新聞社をも退きぬ。其間、日本宋學史、學界の偉人、南島偉功傳、懷德堂考、尾張敬公等の著述あり。全九年文學博士の學位を得、全年島津公爵家臨時編輯所編輯長となり、全十年宮内省御用掛（勅任待遇）を仰付けられ、全十二年正五位に叙し、全十三年御講書控を命ぜられたり。大正十三年七月某日危篤の報天聽に達するや、畏くも從四位に叙し勳四等に叙せられたり。

父城之助時樹亦た文學を好み鹽谷先生に就き、漢學を修め學校掛として諸生を教授せり。

碩園十二世の祖織部丞時貫、亦頗る文字を解し所領西之村に在住するや、天文十二年葡萄牙船漂流せしを以て同船に乗組み居たる明人五峯と筆談し鐵砲傳來の端を茲に發せり。我國に於て始めて歐洲人と接し互に意志を通じて貿易の紹介を爲し、鐵砲を得て當時の戰國に偉功を奏せしは蹇々匪躬にあらずや。

### 森 友 信

明治廿九年六月廿日生  
大正十年三月廿四日歿

西之表町に生れ父を友諒と云ひ母はミヲ、友信は其第三子なりき。資性剛毅頗る進取の氣象に富めり。小中學を経て陸軍士官學校に入學し、邦家の前途を慮り空陸海鼎立を理想とし、自ら進んで飛行將校たらんとして先家書を作りて所生の許諾を請ひたりき。大正七年輜重兵少尉に任せられぬ。然れども初志を變する能はず、上官に就き再三其承認を請ひ或は峻峯を攀ちて神靈に禱り。大正九年各務原航空隊第一大隊に入隊し刻苦精勵、妙技已に神に入れり。越て十年野外卒業飛行を爲すに當り、再次の突風に機翼を奪はれ伊勢灣中に墜落して悲壯の殉職を遂げたり。即日中尉に進み從七位勳六等に叙せられ 聖上陛下皇太子殿下より祭祀香花料を賜はれり。後墜落地磯津漁業組合に於ては森中尉の忠烈を紀念とす云々の文字を明記せる、六躰地藏尊を共同墓地に建設せり。

あとがき

我が種子島は、古来、文運盛んなところとしてひろく喧伝され、島民もまたみずから其の誇りを持ち続けているのであります。

もとより世を開き文運をたかめるは人でありませう。この観点から、六十数年前、森友諒、遠藤家彦の両氏は、種子・屋久の人物（一〇）名を選び「種子屋久先賢伝」を編集、上梓されたのであります。文は簡にして要を尽くし、体は朗々として漢文調の格調たかいもの。しかも此の書は人物伝たるにとまらず、種子島史の重要な一面を語るものであります。しかし惜しむらくは此の書も既に絶版に属し、恐らく島内には十冊前後を残すのみではありますまいか。本会が再刊を企てた理由もここにあります。

リプリントによる原本の体裁を忠実に再現するにつとめました。この間いたく福岡市在住の岩海信時氏の労をわずらわしました。付記して感謝の意を表わす次第であります。

昭和五十二年四月二十五日

平 山 武 章

昭和二十一年十一月二十一日印刷  
昭和二十一年十一月二十七日発行

(非賣品)

著 者 森 友 諒  
遠 藤 家 彦

印刷人 和 田 彌 兵 衛  
鹿兒島縣熊毛郡西之表町  
印刷所 和 田 書 房 印 刷 部  
鹿兒島縣熊毛郡西之表町  
振替福岡七四六九番

發行所 栖 林 神 社 復 興 會

復刻・種子屋久先賢伝

昭和五十一年五月二十五日発行

発行者 平山武章

鹿児島県西之表市西之表

七六六〇―一二

発行所 種子島を語る会

印刷所 深田印刷株式会社

福岡市博多区博多駅南三―二―六



